

# 新シリーズ インターフェースを考える <その1>

## はじめに

これまでに AAIN57 号等でもすでに触れた「試験研究と現場ニーズの乖離」は、世界各所で大きな問題になってきているように感じる。昨今の農業研究者（特に若手研究者）は高度化・細分化されたテーマのもとでの試験研究を実施せざるを得ない状況にあり、必ずしも多様化した農家のニーズにこたえきれない場合が多いことはすでに述べた。また現場ニーズに基づいて成果の見えにくい研究をおこなうより、「評価」を上げるためにより成果の出やすい研究で論文数を増やす必要がある、ということも背景にあるのだろうか。さらに途上国（シリア等の事例）では、研究者が現場の農家を訪問しても農家の問題点を探し出せないといった傾向があり、研究者の現場調査によるニーズの発掘が適正に行われない状況に陥っていると言える。

こうした状況については、日本も決して例外ではないが、我々が接する途上国の研究者において特に顕著で、その特徴を要約すると、①研究者が現場に出る機会が少ない、②エリート意識から農家の言うことをバカにする、③普及組織との連携が薄い、④利用困難な最先端技術や機材に目が行きがち、⑤論文生産が自己目的化する、などの問題点が研究者の通弊として指摘できる。①と②は論外であろうが、現実には問題として存在し、これら①から⑤が複雑に錯綜するなかで試験研究と農家ニーズの乖離に拍車をかけていくのではないかと危惧される。

もちろん現場ニーズがわかれば研究者が即それにもとづく研究を開始できるというほど問題の構造は単純ではなく、両者の溝を埋めることがそうたやすいものではないことは容易に想像がつく。

なかにはこうした課題に対して真摯な目を向けようとする研究者も存在しているがまだ少数派であり、問題の改善や克服の余地はたぶんにあるものと思われる。まずは研究者自身の努力が第一であるが、国際耕種はコンサルタントとして海外現場で両者のインターフェースの役割を果たすべく、調査、調整、問題解決等の能力に磨きをかけようとしてきた。今後、こうした農民と研究者の間のインターフェース的な役割を演じる個人なり組織の重要性がますます高まってくると考えられる。

JICA が途上国で実施している多くのプロジェクトにおいても、「ファーマーズ・フィールド・スクール (FFS)」、「農民研究グループの導入」、「農民参加型の共同研究」、あるいは「普及と研究の連携」といった活動を通して、離れすぎてしまった試験研究現場と農家生産現場の距離を縮める努力をしている。本シリーズにおいては、これまでに我々が関わったプロジェクトにおける事例を一つひとつ検討する中から、その実態や背景あるいは距離を縮めるための有効な手法について具体的に考えてみたい。

本シリーズにおけるキーワードとしては『つなげる』、『ネットワーク』、『コミュニケーション』等を念頭に置いている。また「インターフェース」という点では“農民と研究者”に限定せずに、もっと広く、たとえば海外のプロジェクトで日本人が“インターフェース”になって異なる機関や部署の人たちをつなげる、環境教育における“インタープリター”が自然と人をつなげる等の事例にも目を向けていきたい。



農民への普及活動の例



さまざまな部署とのワークショップ



自然と人をつなぐインタープリター